

吾輩は猫である

夏目漱石著 伊藤整、荒正人編
集英社 1970 (漱石文学全集:1)

漱石が見た物理学 —首縊りの力学から 相対性理論まで—

小山慶太著 中央公論社 1991 (中公新書)
法学部准教授 大井 万紀人

漱石の処女作「吾輩は猫である」は、何度読んでも涙がでるほど面白い。これほど可笑しい小説は他にないんじゃないだろうか？

例えば、とある正月、年賀状が猫の主人の「教師」のところへ届く。その一枚に、外国の猫が机の上に4、5匹並び、ペンを握ったり書物を開いたりして勉強する様子が絵に描かれている。が、ただ一匹だけ猫の列から外れて机の端で「猫ちや猫ちや踊り」を踊っていて、脇に「書を読むや躍るや猫の春一日」と一句ある。どうみても「吾輩」宛の年賀に相違ないのに、先生は「はてな今年は猫の年だったかな」などと間抜けなことを言う。

「吾輩は猫である」のもう一つの楽しみ方は、作品に登場する「自然科学」の記述である。有名なのは「首つりの力学」理論である。一本の縄で同時に絞首刑に処さる12人の侍女に対して、力の釣合を記述する連立方程式(三角関数を含む)が作品中に現れる。物理の方程式を載せた文学は、きっと世界でも珍しいだろう。その他、動物に関する4つの法則や、胃病の薬の話などが登場する。どれも、自然科学をちゃかしたもので、その内容がちゃんとわかれば爆笑は免れぬはず。この方面の解説本として小山慶太氏の著書も紹介しておいたので、併せて読んでもらいたい。



「読書のスルメ」で紹介された本は、平成23年4月から5月(予定)まで図書館本館(9号館3階)情報検索コーナーにて展示しています。

まずは
あなたの学部の
先生からの
オススメ本を
読んでみよう！

